



TITLE:

ペツテイ労働価値説の一考察 (経済 學史特集)

AUTHOR(S):

松田, 弘三

CITATION:

松田, 弘三. ペツテイ労働価値説の一考察 (経済學史特集). 經濟論叢
1952, 69(5-6): 224-243

ISSUE DATE:

1952-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/132256>

RIGHT:

京都大學經濟學會

經濟論叢

第六十九卷 第五・六號

我國の當面する金融問題と今後の金融政策…… 鈴木 剛

經濟學史特集

ペッティ勞働價值説の一考察…… 松田 弘三

アダム・スミスの地代論について…… 溝川 喜一

統計的推理と統計的法則…… 足利 末男

ジェントリ論…… 角山 榮

昭和二十七年六月

ペッティ労働價值説の一考察

松 田 弘 三

ウィリアム・ペッティ (William Petty) (1623-87) が、「近代經濟學の建設者」¹⁾とよばれているのは、いうまでもなく、彼が労働價值説の創始者であるからである。しかしながらペッティの労働價值説は、スミスやリカードのそれとは段階を異にした、特質を有するものと考えられる。わたしは、ペッティの價值論を特徴づける二、三の點と、彼における労働價值説成立の意義とを、問題にしたいとおもう。

(1) Marx, *Theorien über den Mehrwert*, Bd. I S. 1

一

ペッティの労働價值説をもつとも明確に定式化しているのは、「租税および貢納論」(A Treatise of Taxes and Contributions, 1682)のなかの次の文句である。

「もしある人が、一ブッシェルの穀物を生産しうると同じ時間をもつて、一オンスの銀をペルーの地中からロンドンへ運んでくることができるならば、一オンスの銀は一ブッシェルの穀物の自然價格である。そこでもし採掘の一層容易な新しい鑛山によつて、ある人が従來の一オンスと同じ容易さをもつて二オンスの銀を獲得するこ

とができるならば、他の事情を同一と假定して、以前には五シリングであつた穀物は、いまや「ブツジェル」につき十シリングとなるであらう。」

ここでペッティが、彼の思想の自然法的基礎を示すところの、自然價格という言葉で、商品の價值を理解していることは、いうまでもない。しかもそれは單なる價值ではなくて、相對的價值（交換價值）であることは、明かである。そればかりではない。この相對的價值を、彼はまた、その貨幣的表現において、すなわち價格において取扱ひ、そして貨幣をば現實に存在する商品、すなわち金および銀だと考へてゐる。

なによりもここに、ペッティが重商主義的觀念に囚われていたことが、現われている。しかしながら、ペッティの重商主義的見解は、彼の價值論の弱味となつてゐるばかりでなく、かゝつてその強味ともなつてゐるのである。すなわち、この重商主義的な考へ方が、ペッティを、商品價值の自然主義的な取扱ひ方、いいかえれば價值を自然的過程としての労働の屬性に還元するやり方、におち入らせなかつたのである。

すなわち、生産に對する流通の優位を主張する重商主義は、ペッティに貨幣形態を無視することを許さなかつた。しかしペッティはもとより、商品で表示される労働の二重性格を理解することはできなかつたから、從つて價值形態の發展を貨幣形態に至るまで追跡することは、不可能であつた。そこで彼は、全社會的労働のなかから、現實労働の特殊の種類を選び出し、これを他の種類の労働に對立させてゐる。すなわち、金および銀を採掘する労働だけが、直接に交換價值を創造する。その他の労働は、その生産物が金および銀と交換されることによつてのみ交換價值となる、というのである。このようにいうことによつて、ペッティは實際には、「ブルジョア社會における労働は、直接的な使用價值を生産せねばならぬのではなく、商品を、いいかえれば交換過程において讓

渡されることにより、金銀として、すなわち貨幣として、すなわち交換価値として、すなわち對象化された一般的な勞働として、みすからを表示しうる使用価値を、生産せねばならぬ。」と考えたのである。

(註一) ペッティはその一般的見解においては、いまだ重商主義者であつた。たとえば彼は、銀や金や寶石は、他の財貨と異なり、「壊れたり變つたりしないのでいついかなるところにおいても富である」とし、それゆえ、これらを貯蓄させるような商品を生産することは、なかならず有利であるとしてゐる。このような重商主義的見解は彼の諸著作の隨所に見られる。

しかるにペッティはまた他方において、重商主義に對して批判的な思想をも述べてゐる。たとえば、「貨幣は政治體の脂肪にすぎない」とし、その過剰はその敏捷を妨害するとしてゐるがごとき、また、直接に貿易差額制度を批判してゐると思われる箇所さえ見出されるがごときである。

このペッティの見解の過渡的性格は、彼の價值論を特徴づけて、「重商主義的勞働價值論」とも名づけられうるような性格のものたらしめたのである。

(註二) ペッティの價值論の長所と短所とはこれを、彼より約七十年後にさらに一段と明瞭なかたちで、勞働價值説を展開したベンジャミン・フランクリン(Benjamin Franklin)の價值論と對比してみると、一層明かとなる。フランクリンはペッティと同一の例、すなわち穀物と銀とによつて、説明してゐる。「銀の價值は他のすべての物の價值と同じように、勞働によつて測定されうる。例えばある者は穀物の生産に、ある者は銀の採掘および精鍊に従事するものと假定しよう。一年またはその他の何らかの一定期間の終りにおいて、穀物の全生産物と銀の全生産物とは、それぞれ他のものの自然價格である。そしてもし一方が二〇ブッシェル、他方が二〇オンスであるならば、一オンスの銀は一ブッシェルの穀物の生産に用いられる勞働に値する。」ここで注目すべきことは、ペッティが銀は穀物の自然價格であると語つてゐるのに反して、フランクリンはあたかもペッティと論争でもしているかのように、穀物と銀とは「それぞれ他のものの自然價格である」と主張してゐることである。

従つてフランクリンは、商品の交換価値とその貨幣的表現である價格とを、同視していない。また彼にあつては、金銀を採掘する勞働のみでなく、一切の勞働が價值を決定する。このように、フランクリンはペッティより一步前進しているが、しかも他方において、彼はペッティに比べて一步後退してゐる。すなわち、彼にあつては、穀物と銀との間の、もしくは商品と貨幣との

間の、一切の差異が消失している。いずれも労働によつてつくられるものであるがゆえに價值である。また價值を形成する労働の抽象的な、一般的、社會的な性格（この社會性は個人的な諸労働の全面的な譲渡から生ずる）が把握されなかつたために、貨幣をこのような譲渡される労働の直接的な存在形態として認めなかつた。それゆえ彼は、貨幣と價值を形成する労働との間の内面的連絡を認めることができず、労働は一面的に價值の尺度として、貨幣は單なる交換手段として考えられた。これらのすべての誤謬は、商品價值の自然主義的な取扱ひ方から生じたものと云ふよう。

- (5) Petty, A Treatise of Taxes and Contributions, The Economic Writings of Sir William Petty, ed. by C. H. Hull, Vol. I p. 50—51.
- (6) Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, S. 41.
- (7) Petty, Political Arithmetick, Hull's ed. Vol. I p. 259—260.
- (8) Petty, Verhum Sapient, Hull's ed. Vol. I p. 113.
- (9) Petty, Political Anatomy of Ireland, Hull's ed. Vol. I p. 192—193.
- (10) ローマンズ「經濟學史」一卷「九六頁
- (11) Franklin, A modest Inquiry into the Nature and Necessity of a Paper Currency, The Works of B. Franklin, ed. by Sparks, p. 265.

ところでマッティはまた労働のほかに土地をも價值の尺度と考えているのであるが、これも彼が商品の價值をそれと交換される貨幣量、金銀と同視したことから生じたものである。ただし金銀の生産には労働のみならず自然も参加するがゆえである。すなわち價值を具體物としての金銀と同視することによつて、價值をつくる労働と使用價值をつくる労働とが、そこで統一されることになる。かくして、「労働は富の父にして能動的原理であり、土地はその母である。」という彼の根本思想から、ただちに價值決定の問題に關する次のような主張が生れる。「すべての物は二つの自然的單位、すなわち土地と労働とによつて評價さるべきである。たとえば船舶や衣服は

これこれの量の土地と、これこれの量の労働とに値するといふべきであらう。なぜならば、船舶と衣服とはともに、土地とそれに對する人間労働との創造物であるから。¹⁰⁾そしてペッティは「土地と労働との間の自然的同價 (Natural Par) を見出し、二つの單位の一方によつて、この兩方によると同様にまたは一層よく價值を表現することができ、一方を他方にちよつとペンスをポンドに還元することく容易に還元した」といふ希望をのべている。そして「アイルランドの政治的解剖」(The Political Anatomy of Ireland [1672] 1691) におきては、「經濟學におけるもつとも重要な問題」は「あらゆる物の價值を、土地と労働との兩者のうちのいずれか一方のもののみによつて表現するために、どのようにして土地と労働との間に同價・均等の關係 (Par and Equation) をつくり上げるか、という問題」であるとし、これを次のように説明している。いま二エーカーの土地に放牧された仔牛が、一年間にその肉が百ポンドすなわち五十日分の食物に相當するだけ増えたとすると、それはこの土地の一カ年の地代である。そして人間がこの土地を耕すことによつて、一年間に六十日分以上の食物を生産するならば、その食物の超過分が人間の賃金である。かくして土地と労働とはともに、日々の食物の數量によつて表現される。ここで日々の食物とは、あらゆる種類の百人が生き・働き・そして子を生むために食う分量の百分の一である、¹³⁾というのである。

ここでペッティは次に、「それゆえ一人の成人の日々の労働ではなくて日々の食物が、平均的には價值の共通の尺度であり、それは純銀の價值と同様に規則正しく不變であるように思われる。」¹⁴⁾といつてゐるのでも明かかとおり、後の多くの労働價值論者のごとく、労働による商品價值の決定(投下労働價值説)から労働の價值によるその決定(支離労働價值説)への轉換を行つてゐる。そのことを考慮にいれるならば、ペッティが自己の提出し

た問題、すなわち土地と労働という二つの價值尺度をその一方のみに還元するという問題を、土地の價值を労働に還元することによつて解決していることは明かである。すなわちベッティの労働價值説は、ここでも貫徹しているのである。

さてベッティが、労働とともに土地をも價值の尺度としたことには、上述の理由のほかに、特殊の事情があると思われる。それは彼の理論の生成にかかわるものである。さきに引用した文句は、「アイルランドの政治的解剖」の第九章、すなわちアイルランドにおける土地の測量および分配を取扱つた章のなかにある。元來ベッティの公的生涯は一六五二年クロウエルのアイルランド派遣軍の軍醫としてはじめられた。當時アイルランドは王黨にくみして反亂を起したため、クロムウェルによつて征服され、徹底的な破壊を蒙つた。ベッティは反徒からの没收地整理の事業に當り、まず土地を測量して地圖を作成し、(Down Survey)、次いでこれを將校・兵士・職費を前貸した投機者などの間に分配した。この分配のために、彼は土地評價の基準として、自然のなかに基礎をもつような、つまり客觀的に妥當するところのものを求めた。そしてこの問題を解くために、さきに引用したように、土地と労働との間に同價・均等の關係をつくり上げようとし、結局土地の價值を労働に還元し、労働をあらゆる物の價值の尺度であるとしたのである。ここにベッティが價值の標準としてまず、土地と労働との二つをとり上げざるをえなかつた理由がある。そしてこのことはベッティにおける労働價值説の生成の祕密を明かにしている點で、特に注目に値するものである。すなわちベッティは、アイルランドにおける資本主義的諸關係の強力的創出過程において、その中心となつた土地測量・分配の事業を通じて、身をもつて端初的な資本主義的生産様式の內的連關、その本質を洞察するに至つたのである。

以上にのべたような特殊性にもかかわらず、ペッティは、支出された労働量が自然價格（價值）を決定すると考えていた。そして、労働時間による價值の決定は、あらゆる種類の労働の平等性を前提するのであるが、ペッティはこのことを知っていた。「しかし銀の生産は、恐らくは穀物の生産よりも多くの技術と危険とを要するかもしれないという點を考へても、結局は同じことになる。けだし百人の人々を十年間穀物の生産に従事させ、また同數の人々を同期間銀の生産に従事させるとするならば、銀の純収益は穀物の全純収益の價格であり、前者の一定分量は後者の等しい分量の價格である。」¹⁵⁾これは簡單労働の思想の萌芽であるといえよう。しかしまゝにのべたところからもわかるように、ペッティにおいては抽象的労働の觀念は認められない。

- (9) Petty, *Ibid.* p. 68
- (10) Petty, *Ibid.* p. 44
- (11) Petty, *Ibid.* p. 44—45
- (12) Petty, *Political Anatomy of Ireland*, Hull's ed. Vol. I p. 181
- (13) Petty, *Ibid.* p. 181
- (14) Petty, *Ibid.* p. 181
- (15) Petty, *A Treatise of Taxes and Contributions*, Hull's ed. p. 43

二

さて次に、このような價值論の上に立つて、ペッティがどのように賃金、地代、および利子を考察しているかを見よう。

まず賃金について、彼はそれを法則的ではなく、むしろ規範的に規定している。すなわちいう。「法律は勞

働者にちようど生きてゆくだけの手段を與えるべきである。なぜならばもし彼に二倍のものと與えたとすれば、彼はなしえたであろうし、かつさもなければなしたであろうところの、半分しか働かないことになるからである。そしてこれは公衆にとつて、それだけの労働の成果の損失を意味する。⁽¹⁰⁾と。

この箇所は次のごとく理解さるべきである。もし労働者が六時間の労働に對して六時間分の價值を受取るならば、彼は十二時間の労働に對して六時間分の價值を與えられてゐる現在に比して、二倍の賃金を受取るわけである。そうすれば彼は六時間しか働かないであろう。これは公衆（資本家階級とよめ）にとつて、それだけの労働の成果の損失を意味する、というのだ。

かくして労働の價值は必要な生活資料によつて決定される。労働者が剩餘價值の生産者となり、剩餘労働の提供者となるのは、彼が生活に必要なもののみをえんがために、彼の使用しうるかぎりの全労働力を、使用せざるをえざるに至らしめられるからである。

次に賃料、すなわち地代および利子についていえば、ペッティは後者を前者から派生せしめる。地代は彼にあつては、後にフィジオクライトにとつてそうであつたように、剩餘價值の本來的形態である。

まず現物形態における地代について、ペッティはいう。

「ある人が自分の手で一定面積の土地に穀物を栽培することができると、すなわちこの土地の耕作に必要なだけ、掘つたり、犁いたり、馬鋤で掻きならしたり、草を除つたり、刈上げたり穫入れたり、脱穀したり、簸たりすることができ、かつまたこの土地に蒔くべき種子をもつてゐると假定しよう。この人がその收穫から、彼の種子および自分の食つたものと、衣服その他の自然的必需品と交換に他の人々に與えたものとを控除したとき、残

りの穀物はその年の自然かつ眞實の地代であると私はいう。そして七年、あるいはむしろ凶作と豐作とが循環する週期をなすような數年を平均すれば、普通の穀物地代がえられる。」と。

次に彼は貨幣形態における地代を、その自然價格論の上に決定している。すなわちいう。

「しかし附隨的ではあるけれども、さらにすすんでこの穀物ないし地代が、どれほどのイギリス貨幣に値するかが問題となりうるであろう。私は答える。他の一人が全く貨幣の生産と製造とに従事する場合に、同一期間にその支出以上に蓄えうるだけの貨幣であると。すなわち他の人が銀のある國へ行き、そこで銀を採掘し、精鍊して、それをいま一人が穀物を栽培するのと同じ場所へもつてきて、貨幣に鑄造する等のことをなし、また同じ人が、銀のために働いている期間を通じて自分の暮らしに必要な食物を集め、かつ自分で衣服を獲得する等のことをするとする。そうすれば一人の人の銀は、他の人の穀物と價值が等しいと評價されるにちがいない。前者を二十オンス、後者を二十ブツシエルとするならば、この穀物一ブツシエルの價格は銀一オンスということになるであろう。」と。

ここに見るように、ペッティは地代を土地の包藏する自然の賜物からではなく、人間の勞働から導き出している。だが右の引用文において注意すべきことは、そこに賃勞働が排除していることである。つまり彼によれば、地代は賃勞働の存しないところにも存するのである。イギリスにおいては十五世紀後半からエンクロージャー運動がはじまるが、それは耕地の牧羊地への轉換を内容とするものであつて、ただちに近代的農業體制を成立せしめたわけではなかつた。資本家的借地農業の全面的姿容を現出せしめたものは、十八世紀中葉から十九世紀にかけて行われた、穀作經營のためのエンクロージャーである。したがつて當時（十七世紀中葉）においては、なお多

數の自營農民が存在し、農業における賃労働はいまだ注目をひくほどの地位をもたなかつたものと思われる。

しかもベッティにあつては、地代は事實上剩餘價值である。なぜならば、彼にとつては、現物地代は種子および耕作者の生活必需品を超える生産物の超過分であり、貨幣地代はこの超過分の自然價格をなす貨幣量なのであるから。そして彼は、地代の大きさは賃金の大きさと反比例すると考えている。彼はいう。「かくして我々の見るところで、商工業その他新奇な工藝が發達するにつれて、農業は衰えるであろう。すなわち農夫の賃金は騰貴し、その結果地代は下落さざるをえない。たとえば、小麦の價格がブッシェルあたり五シリングすなわち六十ペンスとして、それを生産する土地の地代が生産物の三分の一であるとすれば、六十ペンスのうち二十ペンスは土地に、四十ペンスは農民に歸屬する。」と。

右の引用文を見れば、ベッティが生産物の價值を賃金と地代とのみに分つたことがわかる。すなわち彼にあつては地代は利潤を含んでいる。利潤はいまだ地代から分離していない。（當時の現實においては利潤の一部は賃金のなかにも含まれていたであろうが、ベッティの意識では賃金は丁度生活必需品に等しく、従つて利潤を含みえないのである。）しかしベッティが獨立の範疇としての利潤を知らなかつたのは、彼の分析不足にのみ基くものとは考えられない。むしろ後に述べるように、それは當時の歴史的段階に對應するものであらう。

差額地代についても、最初の知識がベッティにおいて見出される。彼は書いている。「そこへ食物を供給する周囲の地域が大きい人口の稠密な場所に近い、内在的に同様な性質をもつ土地は、遠隔地におけるよりも多くの地代を生ずるのみならず、一層多年の収益に値するであらう。」と。²⁰⁾これは位置の差異に基く差額地代である。彼は土地の豐度の差異に基く差額地代についても言及している。かくして「ベッティはアダム・スミスよりも

立派に差額地代を敘述した。²¹⁾

ペッティはかくのごとく地代の問題を解決した後、土地の貨幣價値の規定に着手する。彼は年地代に一定の年數を乗じたものをもつて地價とみなしている。この年數として彼は三世代の者、すなわち祖父と父と子とが相共に生きうる年數を想定し、當時のイギリスにおいてこの年數を二十一年と算定している。²²⁾ なぜなら、人は自分および自分の最も近い子孫の生存する間だけの年地代を買取ることにより、利害關係を有し、その彼方にあるものは彼にとつてなんらの價値を有しないからである。すなわち彼は土地の價値を資本化された地代とみなしている。しかしながら、彼は利子を地代から引き出しているのであるから、利子率を與えられたものとして前提することはできなかつた。そこで右に述べたような興味深い假定によつて、首尾一貫した方法で地價を導き出しているのである。

ペッティは地代および地價を敘述した後、利子を副次的形態とし規定している。まず彼は利子の本質について次のごとく述べている。「ある人が一定の期日がくるまで、その間に自分にどんな必要が起ろうとも返済を要求しないという條件で、その貨幣を貸出す場合には、彼はたしかに自ら受容するこの不便に對する報償を受取ることができる。そして我々が普通に利子と呼ぶのはこの報償である。」²³⁾と。そして彼はこの利子の標準を地代に求めて、こういつている。「利子の最小可能額は、擔保の確實な場合には、貸付けられる貨幣が購買するだけの土地の地代である。しかし擔保の不確實な場合には、一種の保險料が純粹自然利子に織りこまれねばならないのであつて、利子は元金以下ならばどこまでも高まりうるのである。」²⁴⁾と。

(16) Petty, A Treatise of Taxes and Contributions, Hull's ed. Vol. I p. 87

(17) Petty, *ibid.* p. 43

(18) Petty, *ibid.* p. 43

- (19) Petty, *ibid.* p. 267—268
 Petty, *ibid.* p. 48—49
 Marx, *Theorien über den Mehrwert*, Bd. I S. 9
 Petty, *ibid.* p. 45
 Petty, *ibid.* p. 47
 Petty, *ibid.* p. 48

三

以上においてペティの價值論ならびに、その上に立つ賃金、地代および利子論を概観したので、最後になにゆえペティにおいて労働價值説が成立したか、またこの労働價值説の歴史的意義はどこにあるかということを考えてみたい。

まず労働價值説成立の現實的基礎、すなわちその社會經濟的基礎が問題とされねばならぬ。それはいうまでもなく、商品生産と商品流通との一般的支配的な發展と、それに基づく人間の自由と平等の觀念の確立である。ただし、大規模商業とりわけ貿易は自由で平等な權利をもつ商品所有者を、マニファクチュアは自由な——一方ではギルド的束縛から、他方では労働力を自ら利用するための手段から自由な——労働者として、雇主と平等の權利で契約を結ぶことのできる者の一定數を、必要とするからである。マルクスのいうように、「價值表現の秘密、すなわちすべての労働が人間の労働一般であるがゆえの、またその限りでの、すべての労働の同等性および同等な妥當性は、人間の同等性の概念がすでに一の國民的成心の固定性をもつときにのみ闡明される。だがそれ

は、商品形態が勞働生産物の一般的形態であり、かくしてまた、商品所有者としての人々相互の關係が支配的な社會的關係であるところの、一社會においてはじめて可能である。」²⁵⁾それゆゑ勞働價值説は、身分秩序をその存立條件とする、封建制の鎖からの人間の解放が、すでに物質的にも精神的にもなしとげられた、十六世紀以降の資本主義時代において、はじめて誕生しえたのである。

だがそれだけではない。近代的生产様式をはじめて理論的に取扱つたものは重商主義學説であるが、それは商業資本の運動において自立化した、流通過程の表面的な諸現象から出發し、従つて假象のみとりあげた。商業資本家は、生産過程において支出される勞働に對して直接の關係を有しない。彼は購買價格と販賣價格との間のひらきを知っているにすぎぬ。しかるに産業資本家は生産過程において勞働を搾取するために、これを賃勞働として組織している。彼は勞働を無視することはできない。これ、産業資本が歴史の舞臺の前面に押し出されてくるにつれて、理論的考察が流通過程から生産過程へ移行し、價格形成の基礎を勞働にもとめようとする試みが現れてくる所以である。それによつてはじめて、經濟學は科學となつた。

そしてこのような試みに、世界史的にもつとも早く成功したもののこそ、ペッティである。ペッティの時代はすでにマニユファクチュア時代の中期であり、毛織物工業をはじめ多くの鑛工業において産業資本の勃興があり、又商工業ブルジョアジーは絶對王政を倒して自らの政權をうち立てる（一六四〇—一六〇年のピューリタン革命）程強力となつていた。従つて彼が重商主義的思想をもちながらも、勞働價值説を生み出しうる社會經濟的基礎が存在していたのである。

(25) Marx, Das Kapital, Bd. I S. 65

次に、ペッティによつて端緒をひらかれた、労働價值説のもつ歴史的意義を見よう。第一に、労働價值説は労働者の理論であり、しかも初期のものほど——理論的に不完全ではあるが——、それがはつきりしていると考えられる。

ペッティのいう労働とは、「財のための人間の——自然的に堪えうる幾時間にもわたる——簡單な運動」のことであり、そして、「共通價格は完全に成長した一人の人間の日々の労働である。」とされているのであるが、それが利潤を目ざす資本活動と區別されず、いわんやこれと對立せしめられていない。それは彼の時代すなわち十七世紀中葉において、資本主義的生産方法がいまだ十分に發達せず、資本家と労働者との分裂が顯著でなかつたという事情によるものといつてよい。「近代的经济體制は封建的秩序に反抗して、働く者の立場から自己を形成してきたのである。」²⁹⁾それはなによりも、ブルジョア革命において、ブルジョアジーが、いわゆる第三階級の頭部として、平民、前期プロレタリアートを率いて、絶對主義と闘つたことに現れている。そして生産のなかにおいても、労働者が資本家に經上つてゆく社會的梯子は、いまだ全く斷ち切られてはいなかつたのである。

さきに述べたように、ペッティはまだ地代や利子と區別された利潤の觀念を有していないのであるが、それは彼の分析の不徹底を物語るというよりは、むしろ現實が分析の對象を提示しなかつたからであるといわねばなるまい。かくのごとく彼の労働價值説が資本と労働との未分化の段階に照應するものであつたとすれば、そのところの労働は資本活動の本質としての企業者活動をも含めた生産活動一般、すなわち廣義の労働の意味でなければならぬ。^(註三)ペッティはこのような意味での労働者の立場に立つて、その經濟理論を築き上げたのである。すなわち彼はこのような勤勞者、正確にいえば當時の歴史的段階において勤勞者一般を代表していた、マニユファ

クチュアの産業ブルジョアジーとその上に立脚する商業ブルジョアジーのイデオログだったのである。このような生産的市民階級の代辯者として彼は、不生産的貴族階級を鋭く批判しつつ、國民的生産力の發展を念願として、彼の社會經濟に關する多くの書物を著したのである。その意味で彼は歴史的に進歩的であつたといつてよいであらう。

(註三) ペッティが全剩餘價值を地代として把握し、現實においては賃金と合體して存在すべき利潤の一部を見なかつたのも、かえつて彼が資本活動と勞働とを同視していたことを、表示するものではあるまいか。

マニユファクチュア時代の終末期の經濟學者であつたアダム・スミスにおいても、資本家と勞働者との階級分化はいまだ決定的なものとは考えられておらず、第三階級が一體として捉えられていることを示すところの見解が見出される。もちろん彼は文明社會において極端な貧富の懸隔が存在することを確認しているが、しかも上流階級に對立して中等および下層階級を一括して考へている。ここにいう上流階級とは封建的絶對主義的支配者たちのことであり、中等階級とはいふまでもなく市民階級のことである。しかしながら、スミスにあつては明白な利潤の觀念が存在する。彼はいう。「勞働者が原料に附加するところの價值は、二つの部分に分解する。すなわち一部分は彼らの賃金を支拂い、他の部分は雇主が前貸したところの全資本に對する利潤を支拂う。」と。またいう。「利潤は勞働賃金とは全然異つた原則に支配される。そしてそれは監督および指揮の勞働の量、激しさ、または工夫となんら比例するものではないのである。それは全然使用される資本の價值によつて規定されるものであり、その大小はこの資本の大小に比例するものである。」と。すなわち利潤は明かに勞働者の生産した價值からの控除であり、資本機能によつて資本家に歸屬するものであると考へられている。

すでに産業革命の洗禮をうけていたリカアドオにあつては、利潤の根據が理論的に明瞭にされていないにもかかわらず、資金と利潤との對抗關係は一層明瞭に認識されている。すなわち彼はいう。「資金として支拂われる比率は利潤の問題においてもつとも重要なものである。なぜならば資金が低いか高いかに正確に反比例して、利潤は高くまたは低いであろうということは、ただちにわかることだからである。」と。もつともその利潤と資金とは地代を共通の對立者とし、そのかぎりでは利害が一致するものと考えられていたのであるが、かくして彼らの考えた労働とは、資本活動と區別された意味における肉體的な生産活動のことである。すなわちそれは企業者活動をも含めた廣義の勤勞といつたものではなかつた。

スミス、リカアドオの労働價值説は同じくブルジョアの労働價值説ではあつても、ベッティのそれとは明かに段階を異にするものである。ベアは、「ベッティよりリカアドオに至るまでのすべてのイギリスの大經濟學者」のいうところの労働とは「資本家的労働である。」と述べているが、ベッティのいう労働とスミス、リカアドオのそれとを等質のものと考へているかぎりでは、それは明かに誤りである。もつともスミス、リカアドオの價值論もそれがブルジョアの労働價值説であるかぎり、資本と労働との分化を認識し、労働を價值の源泉としながらも、資本の労働に對する優位を前提していることは承認されねばならぬ。その一つの表現が、スミスにおける支配労働價值説—價值構成説であり、又リカアドオにおける價值論の修正である。スミスやリカアドオの理論も、資本主義社會のもつ矛盾がいまだあらわになつておらず、資本家階級による生産力の發展が労働者階級の利益の増進と相反することが明白になつていなかつたかぎりにおいて、歴史的に進歩的でありえた。しかし彼らの理論は、ベッティのそれとは異り、資本と労働との機能の相違を前提とするものであつた。

科學的あるいはプロレタリア的勞働價值説は、いうまでもなくマルクスによつて完全に展開せられた。それは資本家と勞働者との敵對關係を表現する、剩餘價值學説の基礎理論たるものである。ここでは勞働は勤勞一般ではなくして、プロレタリアートの勞働である。

企業者活動と勞働との未分化に立脚した勞働價值説（小生産者の勞働價值説と名づけてよいであらう）が、企業者活動と分離した勞働に立脚し、しかも資本の優位を前提するもの（資本家的勞働價值説）となり、さらに資本と對立した勞働に立脚し、價值形成における資本の役割を完全に否定するもの（勞働者の勞働價值説）となつたのは、一面において理論それ自身の論理的發展、すなわち科學的經濟理論の完成の過程であると同時に、他面において資本主義發展の各段階に對應するものであるといえよう。これはいわば勞働價值説の辯證法であるが、それは市民社會自體の辯證法的發展の反映である。すなわち、初期資本主義においては、企業者活動と勞働とが一體として生産力發展の擔當者であつたものが、産業革命による階級分化の進展によつてこの兩機能が分化し、さらにそれ以後は資本の生産力が勞働者を犠牲としてのみ行われるようになった。そしてブルジョアジーはまったく勤勞者としての意義を失ひ、やがて社會の寄生者にさえ轉化して行くこととなる。こうなると現存社會の科學的認識は、資本家階級の利害に反するものとなつてくる。それゆゑブルジョア經濟學は、資本主義の確立に至るまでの段階においてのみ、すなわちベッティにはじまりリカドオに終るところの古典學派においてのみ、進歩的・科學的であり、また多かれ少かれ勤勞者的でありえたのである。勞働價值説はここで勤勞者的なものから、勞働者的なものへ純化徹底することによつてのみ、存續しえたのである。

しかしマルクスも、企業者活動の過渡的合理性はこれを認めていた。彼は資本主義社會における企業者が、生

生産過程において、オーケストラの指揮者のような指揮労働と、奴隷所有者の場合と同様な、労働力搾取のための監督労働との、二重の役割を果すものと考えたのである。^(註)このように、すべての結合的生産様式において必要な生産的機能が、階級対立から生ずる特殊的機能と不可分に結びついているところに、階級社會の悲劇があるのである。しかも資本制生産はやがてこの指揮監督の労働を資本所有から分離し、資本家を全く無用の存在たらしめるに至つた。

かくして企業者活動と労働との矛盾が眞に止揚されうるのは、資本主義社會よりもはるかに高度に發達した生産力を基礎とするところの、完成した社會主義社會においてであろう。そこでは單に全人民が勤勞者であるばかりでなく、また肉體的労働と精神的労働との差別が消滅するに至るからである。

ベッティを先驅者とするところの労働價值説のもつ歴史的意義の第二のものは、それが革命的な理論であることであると考えられる。

まず労働價值説はさきに述べたように、人間の同等性の概念に立脚するものであるから、人間の不平等性を基礎とする、封建的あるいは絶對主義的身分秩序と鋭く對立し、これと抗争すべき必然性をもっている。そしてそれが、商品生産と商品流通とを資本主義にまで展開するための闘争の表現であることは、いうまでもない。その意味で、労働價值説は純粹に經濟的な理論であるにもかかわらず、むしろそれゆえにきわめて革命的な理論であるといわねばならない。^(註四)かくして、それはブルジョア革命の產物であり、その一つの理論的表現であるといつてよいであろう。ベッティの理論は正にこのような理論であつた。

(註四) さらに労働價值説はそれが私有財産の基礎づけとして利用せられるとき、一層革命的である。労働が財産の權原である

と云うロックの學說(John Locke, Two Treatises of Government, 1689)は、その完全な表現である。このロックの理論はすべての古典經濟學者に一貫して、その思想的基礎となつてゐるものであり、またブルジョア革命の有力な理論的武器となつたものである。

さてこの勞働價值説の革命性は、このような理論をそれ自身の革命性とともに、その創始者たちが正にブルジョア革命の時代の人であり、さらにブルジョアジーの革命的勢力の側に立つた人であることにも、現れてゐると考えられる。貧乏な織元の子に生れたベッティが百萬長者となり貴族となつたその社會的成功の第一歩を、アイルランドにおけるクロムウェル軍の行政官として踏み出したことは、さきに見たごとくである。ベッティの經濟學的著作は、王政復古後になされたものであるとはいへ、そこに述べられた彼の根本思想はほとんどクロムウェルの下に活動したこの三十代の間に、つくり上げられたものと考えられる。しかるにこのビュリタン革命は、絶對主義に對する商工業ブルジョアジーとヨーマンとの革命であり、クロムウェルは彼らの代表者であつた。ベッティもまたその理論と經歷との双方から見て、マニユファクチュアの産業資本とその上に立脚する商業資本のイデオローグであつたと見做してよいであらう。

またベッティに次いで、新大陸において勞働價值説を發展させたフランクリンは、周知のようにアメリカ革命の理論的實踐的な指導者の一人であつた。彼はアメリカ北部の産業資本の代辯者であつたと見てよいであらう。ベッティとフランクリン——これらブルジョアジーの革命的陣營に屬した人々の革命的精神が、彼らの理論——勞働價值説を裏付けていたといへないであらうか。

このような勞働價值説によつてのみ、經濟社會の本質は、眞に正しく捉えられうる。初期資本主義の革命的イデオローグたちは、そのことを洞察していた。しかるに反動化したブルジョアジーは、この理論を捨てざること

によつて、經濟學を科學から辯護論に轉化した。

以上の推論が誤りでないとすれば、勤勞者第三階級の經濟理論として、ブルジョア革命の理論的表現として、誕生した労働價值説が、二世紀の後、資本主義の矛盾と階級闘争との激化の時期に、プロレタリアートの經濟理論として、社會主義革命の理論的武器として、新たな科學的嚴密性の下に登場するに至つたことも、ゆえなしとしないといふべきであらう。

- The Petty Papers, some unpublished Writings of Sir William Petty, ed. by Lansdowne, Vol. I p. 211
 白杉庄一郎「ペッチの經濟理論」(經濟論叢)第五十七卷第三號四一頁
 A. Smith, Moral Sentiments, Part I Sec. III Chap. III
 A. Smith, Wealth of Nations, p. 50
 Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, p. 21
 M. Beer, A History of British Socialism, Vol. I p. 180
 Marx, Das Kapital, Bd. III 1 S. 418—419, 422—423

本稿は昭和二十六年文部省科學研究費交付金による研究の一節である。